

宋可187 (可下18)

但陰脈微「一作尺脈寒」者。下之而解。 若欲下之 宜調胃承氣湯

四十六「用前三十三方一云用大柴胡湯」

太陽病未解其脈陰陽俱停「一作微」必先振慄汗出而解

但陰脈微「一作尺脈寒」者。下之而解。 宜大柴胡湯

十六「用前第一方一法用調胃承氣湯」

またさらに『千金翼方』を見ると、「承氣湯に宜し」とあって細字注記に「一云大柴胡湯」と記してあり、『脈經』を見ると「大柴胡湯に属す」となっていて、これもまた『千金翼方』と『宋板傷寒論』三陰三陽篇が同じで、『脈經』および『宋板傷寒論』可不可篇が同じです。『宋板傷寒論』の編集方針として、二種類の傷寒論から引いているというのが、この辺りからいえるのではないかと考えています。

翼94 (太陽承氣2)

太陽病未解其脈陰陽俱停。 必先振 汗出而解。 但陽 微者。 先汗出而解

陰 微者先下之而解。 宜承氣湯「一云大柴胡湯」

脈7-7 (可下) 12

太陽病未解其脈陰陽俱停。 必先振 汗出 解。 但陽 微者。 先汗之而解

但陰 微者先下之而解。 属大柴胡湯証「陰微一作尺寒」

くつがえる『傷寒論』の常識③ … 条文が六病位を移動している事実

牧角・次に「いったい小建中湯は陽病の処方か、それとも陰病の処方か」という、問題に触れたいと思います。小建中湯は『宋板傷寒論』では太陽病篇の条文ですが、『太平聖恵方』巻八では厥陰病の条文なのです。「条

文の引越し」が行われているわけです。『太平聖恵方』では「傷寒六日、陽脈瀆、陰脈弦、当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯」とあり、これは厥陰病の条文であるのにもかかわらず、この「傷寒六日」の「六日」の字が『千金翼方』と『宋板傷寒論』では消されて、その条文が太陽病篇に入れられています。小建中湯のほかにも、『太平聖恵方』巻八、巻九の傷寒六日・厥陰病の条文および処方には、『宋板傷寒論』では太陽病の条文・処方となっているものが多数あるのです。

宋 100 (太陽中70) 傷寒。 陽脈瀆陰脈弦。 法当腹中急痛。 先与小建中湯。 不差者。 小柴胡湯主之。

五十一「用前方」

翼 81 (太陽柴胡4) 傷寒。 陽脈涉陰脈弦。 法当腹中急痛。 先与小建中湯。 不差。 与小柴胡湯
聖 8 | 114 (厥陰5) 傷寒六日陽脈涉陰脈弦。 当腹中急痛。 先与小建中湯。 不差。 宜大柴胡湯

牧角…また傷寒日数が異なる現象は、『宋板傷寒論』102条にも見られます。『外台秘要方』では、「傷寒二三日」を「傷寒一二日」にもってきってしまうのです。

宋 102 (太陽中72) 傷寒二三日。 心中悸而煩者。 小建中湯主之。 五十二「用前第五十一方」
外 (仲景傷寒論) 傷寒一二日。 心中悸而煩者。 小建中湯主之方 (1 | 11 a)

岡田…この変化はすごいですね。『外台秘要方』は本当に良い本です。

牧角…『外台秘要方』には、新校正で林億の手が入っています。林億の手が入っていない『太平聖恵方』巻八 および巻九の傷寒六日・厥陰病の中の多数の条文が、『宋板傷寒論』では太陽病篇に転入されています。『太平聖恵方』巻八には、建中湯と猪苓湯の条文があるのですが、それと同様の条文を『宋板傷寒論』であたっ

てみると、条文だけあって処方指示がありません。また、『太平聖恵方』巻八の「傷寒六日」の小柴胡湯の条文は、『宋板傷寒論』99条で「傷寒四五日」に変えられており、太陽病篇に出てきます。そして、『太平聖恵方』巻八の厥陰病の条文は全部、『宋板傷寒論』の太陽病篇に移動しています。このように、まさに「条文移動」という現象がみられるのです。

小高…厥陰病の条文が太陽病に移っているということですが、厥陰病の病態としては熱化がみられるわけじゃないですか。本来時気病・熱病であった場合には太陽病でも最初から熱化しているから、ちょうどそれに該当する部分だということで、たまたまそれを移動しただけではないのでしょうか。

牧角…まあ、そうともいえませんね。

岡田…それを厥陰病と呼ぶか、太陽病と呼ぶかの違いでしょうか。一般的な原則としての「熱化の時期の初期移動」であり、使用する生薬の時系排列が、自在に入れ変わる所以です。

小高…そうすると太陽病が上篇・中篇・下篇に分かれて非常に多くなっている理由は、治療の際に最初にみられる症状を大事にして、該当しそうな条文をあちこちからもってきてしまったのだと考えられますね。

牧角…それで太陽病篇が膨らんでしまったと、なるほど。

岡田…それは『宋板傷寒論』から始まった編纂形式であって、それ以前に見られません。『太平聖恵方』巻八の太陽病は、まだ上・中・下の三部構成にはなっていません。古鈔本『小品方』（尊経閣文庫）には、今本『傷寒』『金匱』に類似した「治三焦論」が見られます。『金匱要略』の「嘔吐・噦・下痢病」脈証治は、篇名が三焦論になっています。『宋板傷寒論』六経を、三焦論で理解する著名医家もいます。太陽病の上・中・下構造と「発汗・吐・下法」および三焦論の関係については、ここでは割愛します。

小高…『宋板傷寒論』の編集方針によって、より実際の臨床に合った、使える条文群を集めたといえますね。

岡田…それぞれの時代の臨床実践に合った形に、古典をまとめ変えたということですね。

小高…まさにそのとおりですね。